

「日中職員室にいるのが自分の仕事なのだ、というのがわかってきた。動かねばならないときだってもちろんあるが、用事が済めばさつきと定位置に戻る。実は、コロナの影響でごっそりなくなってしまう仕事もあって、手持ち無沙汰の時もある。担任教師は、子どもたちの登校から下校まで、息つく暇もないほど忙しいから、そんなときは申し訳ない気もする。もしかして、あいつは気楽なもんだよなあと思われてやしないかとも思うが、ここで無駄に動いてはいけないのである。」

じつとしているとやがて電話がかかってくる。担任に連れられて子どもがやってくる。訪問者が来る。そのうちの何割かは、ややこしい話だ。「そちらの児童だと思えますけどね、指導してもらわないと困るんだけど：」「言うこと聞けないんだつららしばらくここにいなさい：」「アポなしですみません：」。ぼくが職員室にいなかったら、だれかがこれに対処しなくてはならなくなる。それは、そのだれかの仕事の手を止めることになってしまうのだ。

担任に引きずられて今日も男の子が入ってきた。入るまでに廊下ですったもんだやっている。担任の怒声と子どもの抵抗する物音には耳を澄ませているので、子どもが入ってくるまでには、およその状況はつかん

でいる。ぼくの机の隣には、ミーティングと応接兼用のテーブルと椅子が置かれてあり、頭に血の上った担任と子どもがしばらくそこで対峙する。ぼくは、その後を引き受けるのだ。教師の言うことを素直に聞くアイブは、そもそもこういう状況には至らない。担任はやむなく授業に戻り、ぼくはふて腐れた子どもを相手にすることになる。散々説教されてきた子どもだ。その上に小言を重ねても心にかぶせた蓋はきつくなるばかり。ぼくは、狸親父になる。

しばらくパソコンをカチャカチャやりながら横目で様子をつかがい、戦闘モードが和らいだ頃合いを見て、話しかける。

「絵本読むか？」  
うなずけば、それであらかた片が付く。落ち着けばそれで終わり。担任は反省させないと気が済まないかもしれないが、狸にはそんなものはどうだっていい。心静まれば自動的に後悔するかもしれないし、しなかつたとしてもそれまでだ。今は思い至らずとも、いつかは自分で絵解きをしないと限らない。

ひとしきり絵本を読んで、また教室へ戻っていく子どもを見送る。背中を語る。「生きるのつて大変だぞ。すれつからの狸には、わかるまいがの」狸は、苦笑してつぶやく。「はいはい。またどうぞ」。



専業ババ奮闘記(その2) 21

木幡智恵美

スイカのおっつあん(1)

長男の帰省が近づいた。長い年月をかけて大学を卒業し、初任地である神戸で働きだして七年。学生時代は二年近く帰省しなかつた時期もあったが、就職してからは毎年ゴールデンウィークと盆前後の二回帰省している。

「スイカのおっつあん」とは、寛大がつけた名前だ。物心ついた寛大が、盆に里帰りした長男と一緒にスイカを食べて以来、そう呼ぶようになってきた。「スイカのおっつあん」の呼称は定着し、実歩も「スイカのおっつあんに会いたい」などと言う。

小さい頃から一風変わった子で、長男にまつわるエピソードは数知れない。大学を何とか卒業し、就職までこぎつけ、いいおっつあんになってからも長男には開いた口がふさがらなくなることがままある。

何年前か、初めて車で帰省した際のこと。その前に、車の免許取得にまつわるすったもんだについて話しておかねばならない。

長女も大学一年生の夏休みに運転免許を取らせたので、長男にも大学に入った年の夏に帰省した際、地元の自動車学校に通わせた。仮免許までいき、本試験を残すだけになったのだが、どうしてもサークル活動に参加しなくてはならないと言う。「時間が経つと忘れてしまうよ。取ってしまったからにしたら」と夫も私も説得を試みるも、「仮免取って、一年の間に本試験受けるよ。向こうで受けるから」と言いつつ、帰ってしまった。それから何度も、本試験を受けたかどうか、メールや電話をする際に尋ねたが、まだだという返事ばかり。サークル活動にのめりこんで、学業もおろそかになって単位を取得できないばかりか、運転免許も取らない。そうこうするうち仮免失効の期限が迫ってきた。失効するぎりぎりになってようやく川越まで本試験を受けに行ったようだ。結果、不合格。仮免許失効、自動車学校通いは無駄になってしまったのだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。鈴木涼美という、元AV女優で元日本経済新聞記者の文筆家が朝日新聞で「安倍さんが長く支持されるに至った強みは『かわいさ』だ」と指摘していた(9月6日朝刊)。

年金生活者 「かわいさ」が大きな価値として流通する今の私たちの社会を映し出している。

30代 「坊ちゃん育ちの保守政治家で、エリート左派のような冷たさが無い。政策とは別文脈で人間的にチャームングだと思わせる魅力があったのだろう。どこか憎めない感じは、トランプ米大統領にも共通する」。彼女は安倍晋三の「かわいさ」をそう説明している。この「かわいさ」こそが有権者に疑惑や失政を大目に見させたんだと。だとしたら過去の政権とはずいぶん違う。

年金 安倍政権は若者の支持率が他の世代より高いところに特徴がある。「かわいさ」ゆえに政権を支持したのもおもに若者たちだろう。

是として掲げている。そこは挑戦していきたい」と言っているのは、歴代自民政権と同様、改憲は「有言不実行」にとどめるという意味だ。つまり世論の多数派に従おうとしている。

ただし、看板だけはおろさない。おろせば、自民党の結末は緩み、改憲を望む少なくない国民を失望させる。おそらく憲法改正は安倍政権のときのよくな与野党の対立軸にはならない。

30代 野党などが再調査を要求している森友学園をめぐる財務省の公文書改竄問題は、菅政権になっても与野党の対立が続きそうだ。

年金 菅は再調査の意思は示さず、「二度と再びこうしたことが起こらないような体制、仕組みをつくらないといけない」と語っている。そこは本気だろう。政権を揺るがす改竄が菅の知らないところで行われていたとしたら、「下手を打ちやがって」と舌打ちしたと想像されるし、彼の指示あるいは黙認のもとに改竄がなされていたとしたら、「この手は二度と使えない」

従来の政権は主として「強さ」によつて国民の支持を集めてきた。「強さ」は国民生活を豊かにする政策の「実行力」と言い換えればわかりやすいかもしれない。若者たちは、そうした「強さ」を先行世代ほど政権に求めなくなつたと考えることができる。

国民が政権に「強さ」を求めるのは、自分たちの「弱さ」ゆえだ。この場合の「弱さ」とは、向上も安定もしていないと感じる自らの生活の状態を指す。それを変える力を「強い」政権に期待する。自民党はその期待に曲がりなりにもたえることで長期政権を維持してきた。その過程で、大多数の国民があすの食べ物やあすの働き口をほとんど心配しなくて済む時代が到来した。家計に占める選択的消費は必需的消費を上回り、職種も多様化して職業選択の自由が広がった。

国民はかつてのような「弱い」国民ではなくなり、そのぶん「強い」政権に頼る必要がなくなつた。このことをいちばん敏感に感じ取っているのが若

者たちだろう。

「強い」のはときとして「ウザイ」とか「上から目線」とさえ感じる。求めるのはおのずとそれは反対の「かわいさ」ということになる。30代 安倍晋三はそうした「かわいさ」の陰で、集団的自衛権の行使を容認し、敵基地攻撃能力の保有を検討するなど、日本を戦争のできる「かわいくない」国にしようとしてきたとも言える。

年金 だとしても、それによつて実際にできる戦争は熱い戦争、リアルな戦争ではなく、抑止力を競う冷たい戦争、バーチャルな戦争だけだ。若者たちは破壊と流血を「かわいい」とは思わないだろう。

30代 菅義偉が総理大臣になつたらどんな政権になるだろう。年金 彼は朝日新聞のインタビューで、憲法改正は「まずスケジュールありきではない」と語っている(9月8日朝刊)。改憲を半永久的に先延ばしする宣言と言っている。「自民党は党

倍政権の「負の遺産」を実務によつて帳消しにしていこうとする姿勢がうかがえる。

30代 デジタル化は失政にフタをする道具か。年金 行政のデジタル化は、昔の強調する「役所の縦割りをぶち破る」ための強力な武器になる。「これまでは違う次元にあると見なされていたものを連結するのがインターネット」(吉本隆明『超「20世紀論」下』)だからだ。それによつて行政サービスの迅速化、簡素化が一気に進み、国民は歓迎するだろう。

この政策を徹底して進めれば、小泉政権の郵政民営化のような人気政策になる可能性がある。菅は党役員・閣僚の人事も「各派閥からの要望は受け付けない」と、当時の小泉と似たことを口にしており、菅政権が「第2の小泉政権」として国民の喝采を浴びる可能性だつてある。合流野党は手ごわい政権を相手にしなければならなくなつた。

ニュース日記 753  
中村 礼治

## 「かわいい」政権から 「手ごわい」政権へ